

古き挽歌一首 并せて短歌

三六二五番

夕ゆふされば 葦あし辺へに騒さわき 明あけ来くれば 沖おきになづさ
ふ 鴨かもすらも 妻つまとたぐひて 我わが尾をには 霜しもな
降ふりそと 白しろたへの 翼はねさし交かえて 打うち払はらひ
さ寝ねとふものを 行ゆく水みづの 帰かへらぬごとく 吹ふく
風かぜの 見みえぬがごとく 跡あともなき 世よの人ひとにして
別わかれにし 妹いもが着きせてし なれ衣ころも 袖そで片かた敷しきて
ひとりかも寝ねむ

反歌一首

三六二六番

たづがなき 葦あし辺へをさして 飛とび渡わたる あなたづ
たづし ひとりさ寝ぬれば